

エディトリアル

自治医科大学医学教育センター 医療人キャリア教育開発部門 特命教授
東北大学大学院医学系研究科 消化器病態学分野 准教授 菅野 武

地域で紡ぐ糖尿病診療の個別化と連携：エビデンスを「生活の文脈」にする

2型糖尿病は地域医療の現場において、長期にわたり患者と共に管理を目指す疾患の代表である。本特集では、診断から最新の薬物療法、そして地域での多職種連携に至るまで、第一線で活躍される先生方に多角的な視点からご執筆いただいた。

巻頭の坂根直樹先生との対談では、「地域医療における2型糖尿病管理の現在地」を縦横に語っていただいた。先進的なモニタリング技術やAIの活用、臨床研究をいかに日常診療に落とし込むかという視点など、多くの示唆を与えてくださった。

中神朋子先生には2型糖尿病と決めつけてしまうことで、緩徐進行1型糖尿病（SPIDDM）や若年発症成人型糖尿病（MODY）、あるいは膵疾患に伴う二次性糖尿病を見落とすリスクは常に存在することを提示していただいた。「初診時の一瞬の判断が患者の未来を左右する」との言葉を我々は肝に銘じるべきだろう。

合併症管理、特に腎症について、鈴木慎二先生らに包括的ケアの実際を詳説いただいた。重症化予防に対して多面的な介入によって地域全体の健康寿命を支える好例であろう。

指導の核心である食事・運動療法については河口八重子先生に、病態クラスター分類に基づいた具体的アプローチを解説していただいた。理論を一方的に押し付けるのではなく、患者自身の「内発的動機付け」を促す工夫は、明日から実践できることだろう。

さらに、薬物療法の最前線について、能登洋先生に『糖尿病標準診療マニュアル』に即した実践的なステップを整理していただいた。いかに安全かつ効果的に薬剤を選択すべきか、分かりやすい形でエビデンスを読み解くことができる。

高本偉碩先生には、合併症管理における専門医連携のタイミングについて論じていただいた。地域の実情に合わせ、かかりつけ医と専門医が緊密に連携するポイントがまとめられている。

本特集の構成にあたっては、『糖尿病標準診療マニュアル2025』の編集委員長を務められる野田光彦先生に、全編を通して多大なるご指導とお力添えをいただいた。この場を借りて深く感謝申し上げたい。

糖尿病診療の深化は、単なる数値の改善ではなく、患者一人ひとりの生活の文脈を読み解くプロセスである。日進月歩の最新知見をいかに目の前の患者の生活に落とし込めるか。本特集が、読者の皆様が地域で展開される個別化医療と目標の設定の一助となれば幸いである。